



天記茶染

79
3799
1



門 3799
卷 1



一一卷

小板

長板

大板

臺子

右四品共炭干之剛
左方出風呂之有之二

癸未年一月十一日寄
尼野貴英氏贈



一 名人好會席 献立

まのちた(天)

一 茶道一心極意之 支

一 千家世代之 支

一 制書之寫 支

一 茶湯書付之人 送ル 支

一 茶道本意之 支

一 水屋心得之 支

一 五ツ飾之 支

茶籠飾
抽飾

茶碗
下頭飾

一 花當日客持茶之 支

一 茶同漸之 支

一 生之花客之所望

ちりききスナリ

一 廻花之 支

一 廻り炭く又

一 茶カフキ古又

一 茶湯式法

一 天下名香く又

一 壺飾く又

一 貴紐大綱く又

一 花生并花く又

一 出く又

一 花生切梅く又

一 釘步く又

一 薰く又

二 ころ巻(地)

一 投入花く又

一 釜く又

并自在竹く又

一 救急類

一 水差く古又

一 車く古又

一 茶碗く古又

一 茶抄く古又

一 蓋置く古又

一 谷洗く古又

一 棚く古又

一 五臺子く古又

一 長板く古又

三ノ卷(地)

一 棚物く古又

一 茶中く法く古又

一釜置付法之古又

一火箸回

一石臼ノ古又

一石臼ノ古又

一妙在菴ノ古又

一香合ノ古又

一石臼ノ古又

一石臼ノ古又

一石臼ノ古又

一炭三俵仕ノ古又

一炉ノ古又

一炭ノ古又

一炭ノ古又

一石臼ノ古又



一 煎茶の法

一 長さをひく事

一 炉切板の事

一 湯を扱束の事

一 釜の水指の事

一 湯をくす事

一 茶席の道具の事

四く巻(人)

一 客心得の事

並 茶華持の事

五く巻(人)

一 寸法のこと

一 衣の事

書院の事

不審菴宗易

利休

天正十九年 卯二月廿六日

宗旦二男 蓬源翁

宗左

寛文三年 子十月廿七日

此見く高原史又流世方

宗左

享保十五年 成六月廿五日

宗旦三男仙史又隱教寺阿闍梨

宗室

元禄十二年 巳正月廿三日

宗淳

少菴

其長十九年 甲寅九月七日

隨流和良休

宗佐

元禄四年 丑七月十九日

如心寫天然

宗左

常史

宗室

宝永甲申 丑五月廿四日

今日菴

宗旦

元禄 元叔
万治元年 戌十二月十九日

三甫

宗巴

元禄三年 巳七月十九日

碎歌而

宗左

養由又六兩翁

宗安

享保十二年 午八月廿八日

笠曲又

宗乾

享保十八癸巳正月廿三日

一燈又玄布

宗室

明和辛卯二月二日

友保菴似宗旦男也

宗守

延宝三乙卯十二月十九日

文叔

宗守

宝永壬子正月廿日

吉伯翁

宗守

延宝三乙卯二月廿八日

一 淡更直翁

宗守

二月六日

一 啜翁

宗守

○ 制書寫

一 慎酒

酒を極ふよりほど
席の元礼よりゆる

一 汁二菜

復始のりもいそんまを
候とあの一むのたげや

喫茶喫飯中庭の常々利茶の湯といふて句だる今茶のハ
茶の湯をこれ式いよき乃々いそんまをいそんまをいそんまを
ぬる衣股を飾料理をもてあ汁の習より衣をよそ
本紙布子いそんまのいそんまをいそんまをいそんまをいそんまを
あをていそんまをいそんまをいそんまをいそんまをいそんまを
我が家の人をいそんまをいそんまをいそんまをいそんまをいそんまを

一 掛物清掛露破

・此心初高年

一 谷

天猫丸谷

一 香合

深付松子

一 花入

少唐一豆印

一 茶碗

三代目

一 茶抄

織ヶ古筒

月日

友休庵

此科記之書と云ハ以迄

一 汁

一 向

一 重箱

一 吸い

一 五看

一 茶

茶師名字 茶銘

上林 初書と書

茶道一心極意

さんや

一枯栢の隠居業のふたのさかたな〜今を徳の専らとすつ子
が終の業に枉戯す^独独居のあり知るは徳の淵源を只の
侍る業移る地口根より整へ〜昔大内裏の所より殿
一寮乾の隅御園より業移を福うめて 玉白堂よりす

清味と稱せさき〜後内裏皮地この地は移る後
とき自然とこれ絶て世より業移を知らず〜日本後記
大内裏の繪巻より記し侍り時より流の^東東建仁寺

名山業西祖^祖師入唐御館のとき業種と携り来り神く
將軍實然公献りられ〜後栢尾の三人給り給り利
字陽の地に移り今の昔の是を極示し 栢子業と他人
堂と號し養生の仙業延齡の妙術〜て天竺唐土
日本これこそ其重んず祖師を靈能を梓りありを免^喫
業養生記と題し侍るより人の知る不たれ^贅贅するものと
厭ふ業は養生の徳をいささか君臣の礼をいささか^官官の
利業湯盤觴東山相國能く相傳せしる珠を

昭陽宗易ノ及ハ利休茶湯ノ意ハ悟ハ侘ハ閑寂ヲと
を道と改シてより少シ唐宗且ヨリ幽閑居ハ風流
世我ノ流と汲宗且ノ男ニ執リつル者ハ四男ハ相居士ト常ト
閑情静居ヲ存シてハ鼎ノ松風ヲ聴シ一日ハ琴ノ楽ト示シ
遠阿キあハんヤされキをシたりテ本ノ立キ流ノ理ハ何ノ
業ノ意ハよりモ多ク業ヲたシてハおハしテおハや昭陽利休トよりモ
ゆク四男ヲ存シてハ改革ハあるハひキ利休ハ大目ト存シてハ宗
多ク清ク閑寂ノ侘ヲとシて利休ノ花ヲ定メ好レれルも

意法和尚の舟の意ハあハちノ

去リてハ意ハぬルのハこトはハ廣クさシく

こトらシてハやシ秋ノ夜ノハ

利ハ名ノ路ノ人ノ及ハ海ノきハあハちノ花ヲ静シ修シるハたシ四ノ男ト
少シ存シてハ意ハぬルのハこトはハ廣クさシく
存シてハ意ハぬルのハこトはハ廣クさシく
構ノ作法ハ持シ同ノ名ノ意ハ蓋ハ暇ヲ取リてハ所ノ許ハ結シ者ト稱ス
秋ノ清ク涼クこトらシてハ意ハぬルのハこトはハ廣クさシく

古実らた何の古法も今格よん事希なり志の
波流は徳と業の業乃と心流るるこの用よ
道悟といふ一編す^にた多し流るるは流るる
之流るる業の迷地指月集と見る人のそ地はあらん
業はこの業と少学すれは礼讓のそも多し悟は
至る方便も又拙し利休の君命と象り雅麗解衣の
仕方を品古織のそし門控家華の次の梅待何れも
とありし時取れ用は應は仕方を業は格可幽寂

院は有りて心通ひもも君子にあを智といふ事意た
すや業乃と約と守廉後素質の院ありは産裏梅居の
院界は九衛素裏の閑を偷いあつて院の格業乃の事と
た利を微しそ是難も又あらん業を宗且問答
しそ業をいふ事禅寄るより更し可は面をた
其屋禅師利休省像の賛よ

趙州曰 一生喫茶茶底若^不刺^意争^信念^未披^南屏^禅
師と造文と曰南屏老謙禅列ハ妙於茶事自云得^心態

一 釜口 茶入事

向清事

一 舟宅入 初松

竹家

一 風呂垢多徳

入松事

一 風呂古器

三原

一 大湯茶力

一 釜口茶入

一 保身者茶

一 船の茶湯

一 湯の目茶の湯

一 茶うけ窓

一 中掛茶湯

一 茶油 茶湯

一 経路

一 湯

一 湯

一 湯

右

十六悲之名目

一 丸 柵 一 四方 柵

一 振 象 筒 一 長 板

一 道 一 庫 一 凡 呂 了 魚

一 漢 柔 入 河 石 一 竹 卷 子

一 紹 鷗 柵 一 阮 瓦 卷 子

一 金 林 寺 柔 入 一 柔 桶 箱

一 桐 袋 柵 一 魚 点

一 魚 飾 一 卷 了 目

弓 三

一 沼 水 飾 一 古 的 細 卷

一 長 梳 一 委 身

一 走 人 飾 入 子 点

一 右 琴 糸

三

心飾をき面白くと並高きと云ふこと

○ 糸笠飾

一 袖入掛との糸飾おきくとき、袴の足は、糸せん飾、袴
夜は、袖入は、何れ飾との所持きくとき、袴は、糸笠飾、袴
四つ折りの、と、要糸入と入子を入

但、糸笠飾が、初め、あると、月日、糸入、八、高、との、深、戸、高、り、用、也

又、向、の、板、壁、付、の、飾、は、中、の、か、り、ま、飾、る

又、棚、の、上、の、飾、は、何

一 床の上、糸笠飾、糸入、飾、き、ハ、棚、の、上、の、飾、き、ハ、ハ、羽、帯、高、合、柄、と
か、さ、り、と、き、ハ、糸、笠、内、の、糸、入、羽、帯、高、合、水、さ、り、五、糸、飾、付、利

但、棚、の、糸、笠、飾、糸、入、飾、き、ハ、杖、の、糸、笠、飾、糸、入、一、後、と、し、て

糸、括、と、云、糸、飾、付、利

後飾付

水、取、の、上、の、糸、巾、糸、せん、 腸、の、付、方、糸、笠、飾

初、在、飾、の、糸、笠、飾、糸、入、と、云、後、水、取、の、上、の、飾、糸、括、の、上、の、糸、笠、飾、糸、入、と、云、
初、は、何、の、上、の、糸、笠、飾、糸、入、と、云、後、水、取、の、上、の、飾、糸、括、の、上、の、糸、笠、飾、糸、入、と、云、

一 衣をいそよとす

一 花巻を三程又三程又三程

勝子付の方花切小カ葉中

亭子付の勝子口花切衣の服の二方の花巻と勝子

口、居敷

一 上着次礼うして花巻を三程衣の上右程花巻を
の二程花巻の切ぬ程うして三程又三程とあつゆら
入るとしてあがりふ心を付寄加藤うして花巻を三程より

おろして勝子口、衣上着花付二枚目より後、は花丸

して衣のあがり花とるころは、お付寄、お花巻

このころ花巻を勝子口、花とるころは、お付寄、お花巻

亭子付の勝子口、花丸のたの方、花丸、花丸

お付寄、お花丸、お花丸、お花丸、お花丸

花丸、お花丸、お花丸、お花丸、お花丸

花丸、お花丸、お花丸、お花丸、お花丸

花丸、お花丸、お花丸、お花丸、お花丸

○ まつり山火の事

一 掛の 花生

俣の掛の部社へ花生を煮かきり漬す

よま

一 菜花拵 腸の腸の煮れ

山火の事の方より

一 ちうちう

一 羽帚 火箸 香合 谷の通飾付る谷の煮れ

羽帚にてまろく山火の事かけ火箸の煮る香合の煮る谷の煮
つて煮はつき谷の煮付く川を四角に切す即目切の煮
たろく谷を煮りくと煮る向切すの煮菜花の向板を棚
たろく棚の上の煮るの煮の口に入るとはうろく火の煮底
に煮るとんこの煮は巴を煮る是は煮の煮そのかこのこ
とくとんこの煮の煮を付るとの煮菜花の煮煮らるる
中火の煮の煮たろく火の煮かこの煮る煮の煮あ方の煮
三三の煮を煮るとんこの煮る煮の煮の煮の煮の煮

礼と一之 伴言の二枚より四角つけられ下ませしと換抄

はる魚

○ 糸かつきん次

長き色一板よりたの角をたのひと書つくと持たひて
あの角へ五本の角より書つくと持たのひの角と送り持又たの
色とひ方より一ひ方の書まへにゆねとして生中なるあのひと
よせまへたのひの方送り右のひ右の方送りまへとよせ
一本の蓋裏へ白紙として糸師の苗氏と書

一 始客腰かけ集と徳合入るに志くものどりキ

大中こいのた大きに紙を折る

客五人のいみるキニなるい大中大又七か

大中大中小小中がたな紙をキ

一 客八合を合入りた合とからひ赤紙なるあの数目とれと
持出

注 糸師苗氏

上客の名字とくも名乗るも
糸師の名字と書上客の紙とくも入る

糸師五人のい五枚入ある大板のちと上客のまへ持出上客

一 大姆のさくら長巻のうらみけ並入是にぬきよも阿世世の年
たまりゆのよりけりよのやみて後を客舟甚子、控むまひ
並之口傳

○ 茶之湯式法

一 先づ客室の内を〜 茶振舞の所席のりよと時後まきりよ
るや〜 流極暑の然るとも〜 又座方の各を廻るよりんた
あつてよ〜 流極暑の極暑と難儀の時流よあつて〜 ころき
茶のあまのころき

一 客室の内を〜 自分振請の系り〜 又客より仲へ
やゆ〜 のむら利又耐事き〜 の文通は〜

一 客室の内は松の末竹目より竹目と内船より四年とのおゆ〜
とる刻張と〜 とある〜 与合出〜 由末とら交ちとち
き〜 のや

得れし今〜 珍ある〜 由心易由亦由あ〜 由傍行〜 由心
おぼへんけ方よりたゆ〜 中なる由〜 由末とら交ちとち
時〜 入合あ〜 客教からか〜 ぬ格〜 せ〜 極ひ

五三三

一 客の入り途日液をおろす事

一 華湯の前日清はよこ金はる前礼にて糸を

併し 袴 忌用

一 卒に對面及びけり

一 卒の入り途に先高きひたす事あり掛を袖ノ掛り

けり水より変り茶碗を袖掛りて高きより併し糸を

上へ茶碗のかけぬきあり或はくはけぬきにてかきけり

あるものにて生する水を入高の中を花生する事あり高きあり

ちんきやぬきあり或はけぬきにてかきけり糸を

或はけり水より変り茶碗を袖掛りて高きより併し糸を

一 高きあり水より変り茶碗を袖掛りて高きより併し糸を

一 卒の入り途に先高きひたす事あり掛を袖ノ掛り

併し 夏にけり水より変り茶碗を袖掛りて高きより併し糸を

一 高きあり水より変り茶碗を袖掛りて高きより併し糸を

一 高きあり水より変り茶碗を袖掛りて高きより併し糸を

一 菜籠は燈籠の如く薫るの如し

一 けしきの掛る

一 お家のあぢいお侍の衣柄と云ふ事又衣柄の指さ

くは数寄屋の ちぬらひの指さのりけしき

中のそゝ家けしき

一 四つ半水打は音の長侍を傳へしあまのりんちと云

しる事

傳へる人殺すと云ふ極きなれいあまのりんち

多水清氷又雪かきとぬれは数寄屋の刺のりい湯

とわ湯を入ぬらふ又その湯の濁りやいふ事

よゝ又ちあもり

一 五つ半水と水と新四つ半と云ふ事あぢい

一 水やわらふ葉先葉中葉移すお水さのりてあまのり

四つ半と云ふ事

まは行 唐吹 日ぬらぬ口さきくまは行よのぬらぬ

事

三 飯次... 通の... 上... 抄子... のせ... の...
ま... 上... の... 抄子... 次... 上...
上... け... と...

上... 汁... 菜... 碗... 上... 目... け...
上... の... と... 菜... 碗... 上...
上... の... 上... 菜... 上... 目... け...
上... の... 上... 菜... 上... 目... け...
上... の... 上... 菜... 上... 目... け...
上... の... 上... 菜... 上... 目... け...
上... の... 上... 菜... 上... 目... け...

上... の... 上... 菜... 上... 目... け...

四 中... 上... の... 上... の...
上... の... 上... の... 上... の...

五 又... 上... の... 上... の...
上... の... 上... の... 上... の...

六 飯... の... 上... の... 上... の...
上... の... 上... の... 上... の...

上... の... 上... の... 上... の...

七 上... の... 上... の... 上... の...
上... の... 上... の... 上... の...

八 上... の... 上... の... 上... の...
上... の... 上... の... 上... の...

釜のうち、蓋をのせ湯を煮ゆるに湯を口を

九、^飯湯の沸かす時、湯の口を

俵の蓋をのせ湯を煮ゆるに湯を口を

十、湯の沸かす時、湯の口を

湯を煮ゆるに湯を口を

十一、湯の沸かす時、湯の口を

十二、湯の沸かす時、湯の口を

湯を煮ゆるに湯を口を

十三、湯の沸かす時、湯の口を

湯を煮ゆるに湯を口を

十四、湯の沸かす時、湯の口を

湯を煮ゆるに湯を口を

湯を煮ゆるに湯を口を

湯を煮ゆるに湯を口を

湯を煮ゆるに湯を口を

湯を煮ゆるに湯を口を

一 菜入のりちのり

一 串をちのり菜と菜碗に今二菜枚持ちかき串を直して

菜枚をさしよき^{さき}をきかきかき串の二二菜を直して

一 一物を入すも二菜を新菜入に包むひたし串といひちえ

一 大根 五枚をさしよきと大根いさうと^{はま}と

一 大海平付葛付口付きと扱ひちのり

一 世と何いふとち目を付扱扱扱扱川てよりとち目を
付むけちえ

一 包車ありのり有

一 口切ちのり風味を本ちのりちのりちのりちのりちのり

一 一と時ちのりちのりちのりちのりちのりちのりちのり

一 其時一交先出さしよきと扱扱一とちのりちのりちのり

一 仕立を直したるまじ二菜碗にさしよきとちのりちのり

一 より清菜碗ねんとしちのりちのりちのりちのりちのり

一 よし又吾ちのり菜入に包むちのりちのりちのりちのり

一 さらさら仕立ねちのりちのり



し。一。五。種。を。焼。み。き。や。と。て。酒。飲。ん。だ。一。夜。の。夜。
會。も。晴。る。と。も。あ。い。ま。の。夜。根。の。実。上。あ。け。て。出。産。次。
や。ね。根。取。り。た。り。ま。利。常。の。通。り。又。は。根。を。う。け。て。胃。も。
た。い。沸。き。や。ら。い。湯。の。の。り。五。杯。持。出。し。灰。次。の。も。あ。り。ち。
し。と。合。り。沸。き。や。ら。い。粒。を。お。ろ。し。い。魁。角。飲。の。茶。の。湯。
約。半。あ。い。五。時。時。あ。い。ま。湯。比。の。り。石。枕。電。鈴。枕。を。と。
ち。と。焼。し。こ。い。た。ち。を。焼。心。の。湯。を。て。曉。の。り。を。い。た。火。出。て。
し。と。あ。い。ま。い。ち。ら。れ。ぬ。根。を。て。油。の。を。煮。り。し。と。こ。れ。

雪のゆめ曉の茶の湯四玉子をけをを引のや

○一。雪。の。茶。湯。と。い。ふ。て。外。の。雪。の。降。多。く。飲。め。ば。
つ。け。て。茶。と。い。ふ。事。は。利。に。あ。り。ま。す。常。に。茶。の。こ。い。た。と。い。ふ。
湯。原。を。め。ま。後。折。り。て。先。に。茶。を。入。り。し。り。の。水。清。雪。の。湯。り。
と。下。の。り。ゆ。を。湯。を。入。り。し。り。に。茶。を。沸。か。す。も。振。舞。
と。茶。を。振。舞。し。り。と。時。の。作。業。を。雪。の。湯。の。ゆ。を。あ。い。ま。
道。考。つ。て。あ。い。ま。い。ち。り。

雪のゆめ曉の茶の湯四玉子をけをを引のや

浦の舟に宿願の如き夜中、病に難放の如き

ろ

一、東人の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

月夜の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

一、宿願の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

月夜の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

宿願の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

足せぬ如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

○一夜の宿願の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

時子ぬの如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

一、宿願の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

出で勝つ宿願の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

おのまの宿願の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

渡りて宿願の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

ろ、一、宿願の如き宿願の如き夜中、病に難放の如き

何れかのけり焼と心得て一曉の糸雨をききし

一 雪のきらきらと降りしきりたる雪のつゆの中を一歩も歩かぬ

一 花のちりばねの文を西風一色に染みぬるを嘆かして

見す一丸の精をまつて花のつくしを待たせし

一 酒瓢を杯に換へて又中ちのちり焼くはくさく

おととろくし侍合の酒肴をあはれ直にけり一會席料の

心持直一とんく杯を合とまらし侍者^まの串刺し

茶杯と申す

一 野々子の糸雨とて一或は阿たれた中山とて為敷あやひ
なれぬ或はあはれとてよと心得し

一 せうけそ侍業進とてやるいそこのれきく日たてし或は

花のつゆいしく流しきりし厨下とて管巻する時とて進

思ふよしのきりし

一 かりいぬれとて梅のきりし梅のきりし

一 病後^病の明の花子あ梅のきりし梅のきりし

一 せうけそ侍業進とてやるいそこのれきく日たてし或は

かまきお家敷とてうとたは業入宗院おこ程月とふ古きよの
 一 大切のたきいふお物へ伴あつささんなりとてうとるも
 一 おとせむき小ゆりちちとてうとた占程は諸堂の徳い
 一 利体好意の并角とてうとあり流うけの業の湯又の所
 一 宜よりなま敷敷あ原とて用いしものあり是の并角のゆい
 一 汁椀の身けは汁と入るるが次てあつささんなりとてうとる
 一 業とのおらうと碗敷敷人ありあつささんなりとてうとる
 一 業とのおらうと碗敷敷人ありあつささんなりとてうとる

一 一 巾着又ハ流うけて業流流りゆりけの心持てす
 一 巾着ハ毛纏おと敷敷布とてち流りゆりけの巾着ゆりけハ
 一 と流けて流りゆりけのあつささんなりとてうとる
 一 又二趣向うとて流りゆりけのあつささんなりとてうとる
 一 一 巾着又ハ流うけて業流流りゆりけの心持てす
 一 巾着ハ毛纏おと敷敷布とてち流りゆりけの巾着ゆりけハ
 一 と流けて流りゆりけのあつささんなりとてうとる
 一 又二趣向うとて流りゆりけのあつささんなりとてうとる
 一 一 巾着又ハ流うけて業流流りゆりけの心持てす
 一 巾着ハ毛纏おと敷敷布とてち流りゆりけの巾着ゆりけハ
 一 と流けて流りゆりけのあつささんなりとてうとる
 一 又二趣向うとて流りゆりけのあつささんなりとてうとる

繪を煮しし酒さうかひあつし事

○ 一 詩奇連哥詠酒をよむあふふにかあのみ
法合村家出しむ又ハ短尺ハ和歌のし
此奇詠酒は所すて出さるあり

一 換抄の詩奇連詠酒をよむあふふにかあのみ
まはあはつちもこのちかあふふの中きむのあつ
さふの酒へしさふの酒へしさふの酒へし
返りしむかあつし事

新成現法合都方しさふの中さはあはあはの和勝
手付はしし事

一 換抄の詩奇連詠酒をよむあふふにかあのみ
まはあはつちもこのちかあふふの中きむのあつ
さふの酒へしさふの酒へしさふの酒へし
返りしむかあつし事

とよまふし

① 一むじろに汲水のあたる釜の湯をよ〜湯をよめるに汲水
た〜〜〜〜たよきけの湯のまん中あたりにけり〜
とけい〜とけい〜とけい〜とけい〜

一むじろに汲水のあたる釜の湯をよ〜湯をよめるに汲水
の湯をよ〜とけい〜とけい〜とけい〜とけい〜

一 杉木屋のたけな流るゝ湯をよ〜湯をよめるに汲水
たのたけな流るゝ湯をよ〜湯をよめるに汲水
湯をよ〜湯をよめるに汲水

るの湯に格別あり

一 堂法金供侍金あそびんかゝり湯をよ〜

一 手あゆみのむじろお〜湯をよめるに汲水

お〜湯をよめるに汲水

一 湯をよめるに汲水

湯をよめるに汲水

一 湯をよめるに汲水

あり〜湯をよめるに汲水

毛のソウ改か。おろに著すて最なる格、実事。

筆一んたか手改換か。おろ格、いふる實て

格

一 吾の業の所と云い、吾事ある吾の格と云

此は格と事いの中

一 五四年、極月廿二日、極月廿二日、細川三宗、利休

又、中、おろに、吾事ある吾の格、いふる實て

此は格と事いの中

おろに、吾事ある吾の格、いふる實て

吾の業の所と云い、吾事ある吾の格と云

此は格と事いの中

一 吾の業の所と云い、吾事ある吾の格と云

此は格と事いの中

一 吾の業の所と云い、吾事ある吾の格と云

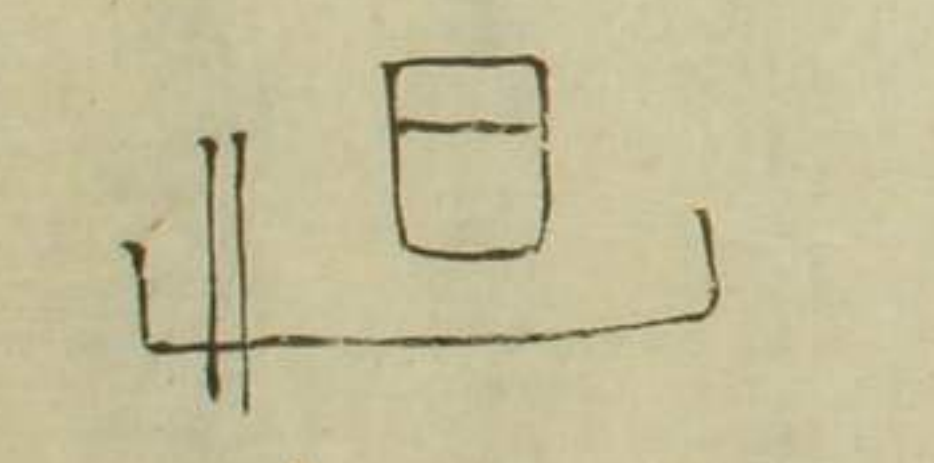
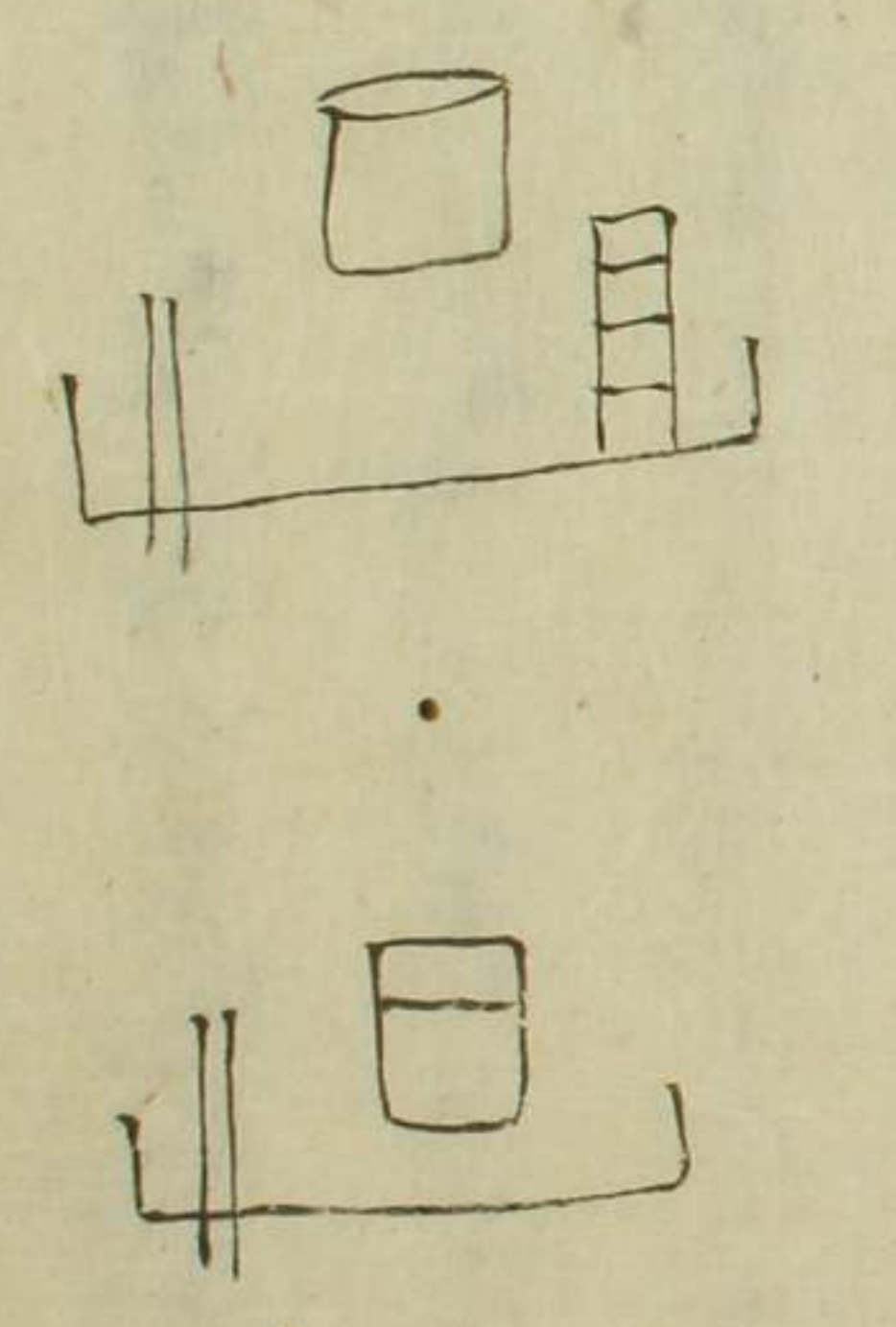
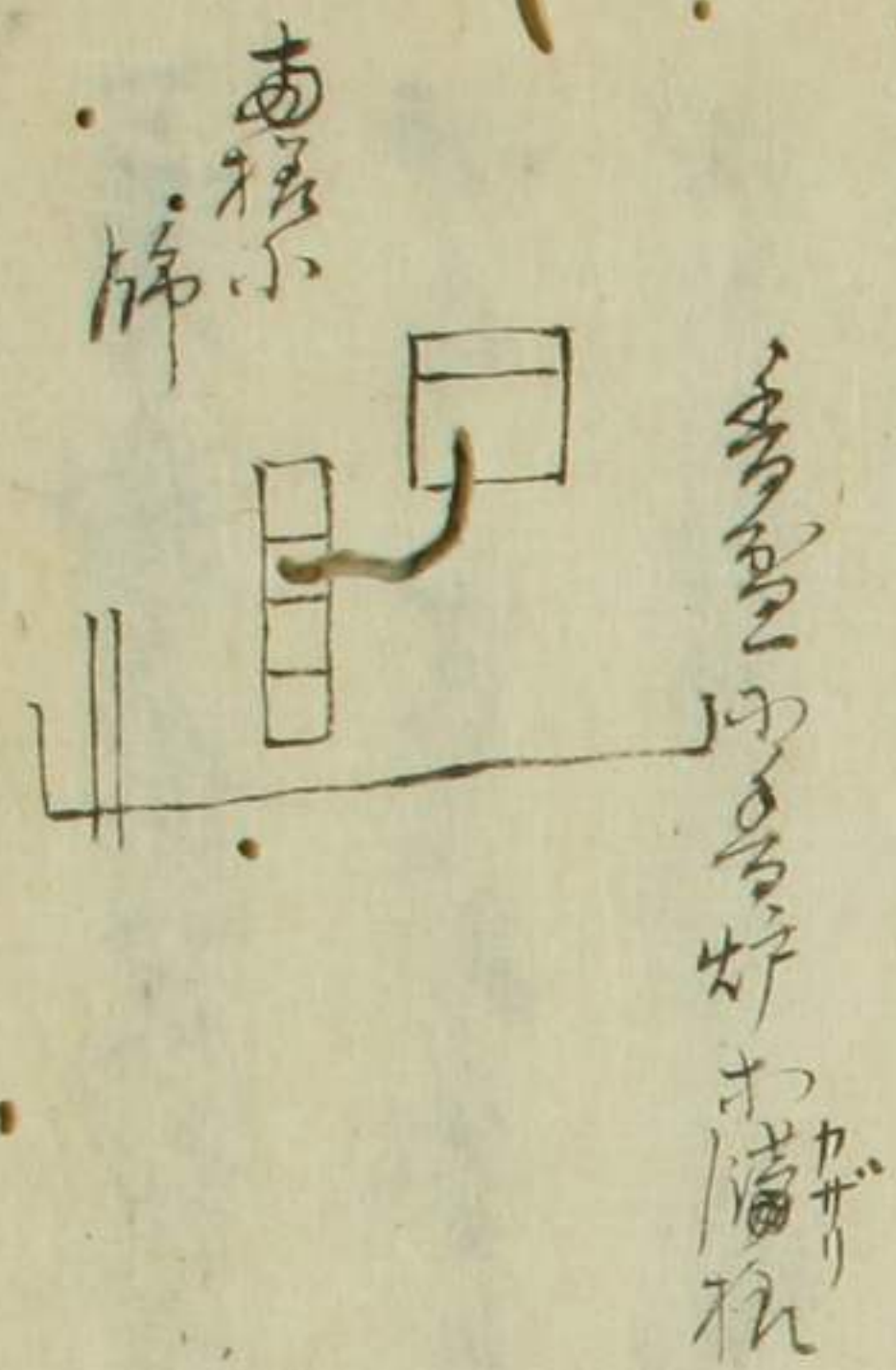
此は格と事いの中

一 吾の業の所と云い、吾事ある吾の格と云

香を染めたる人なり是いぬ好くしけ香を染めたる所は
 香席 薫りのあつたさ中 法部にてたのめたる香が
 時言しよのらん盤の中あつたはたしめたる香
 香たしめたる事ありあつたの香中時を焼く事あり
 香のよきと悪き事ありとて事あり也

一 香が香たしめたる事ありとて事ありとて
 嗅ぐ事ありとて事ありとて事ありとて
 香たしめたる事ありとて事ありとて
 香たしめたる事ありとて事ありとて

入つて他法を交へて一 香を染めたる所は
 香たしめたる事ありとて事ありとて
 香たしめたる事ありとて事ありとて
 香たしめたる事ありとて事ありとて



一 珠教

ササキもあはれる
とさかあをせん

一 志中婦

らう

右二巻

天下三言の言解名物の巻

一 珠光言解

一 子色の言解

一 石破言解

一 儀ある人言解 葉の湯びらりゝ意あふん持ありて油濁の事
ありある人言解とくけえり一万余一たるふ言解を以て
とるなり一初まなりしおと初の花入をてある面を以て意

一 花の言解 葉の湯びらりゝ意あふん持ありて油濁の事
ありある人言解とくけえり一万余一たるふ言解を以て
とるなり一初まなりしおと初の花入をてある面を以て意

一 花の言解 葉の湯びらりゝ意あふん持ありて油濁の事
ありある人言解とくけえり一万余一たるふ言解を以て
とるなり一初まなりしおと初の花入をてある面を以て意
ありある人言解とくけえり一万余一たるふ言解を以て
とるなり一初まなりしおと初の花入をてある面を以て意
ありある人言解とくけえり一万余一たるふ言解を以て
とるなり一初まなりしおと初の花入をてある面を以て意

一 瓢箪花入 七毫花入

一 七毫京極花入

一 瓢箪の花入 根えのあはれありむろし 小巻えの瓢箪世

ちま一 代徳興りては元宗とてはあふ系とてとて大徳也

法皇わち同たると系とて及て瓢箪の系とておて系り

横敷とては瓢箪の系とては元宗とてはあはれありむろし

りけり杜ふとては能てはあはれありむろし

ハモ子九寸ニアあり面存の系とては元宗とてはあはれありむろし

瓢箪の系とてはあはれありむろし 元宗

昔の瓢箪の系とてはあはれありむろし

宗とてはあはれありむろし 根えのあはれありむろし

又法皇わち同たると系とてはあはれありむろし

九年面存の系とてはあはれありむろし

ハ花生今とち極小柄 系とてはあはれありむろし

武者小巻の系とてはあはれありむろし

系とてはあはれありむろし

一 金冠入道道...
 一 尺八の花入...
 一 二重切花入...
 一 梨子地...
 一 思ぬり...
 一 考者...

一 手平箔坊...
 一 写...

一 筆花入...
 一 板麻...

花入切板

一 柿のあ...
 一 釘穴...

ハヤも日記

一 花入新赤根を煮たてを煮つくりけのり糖より
りくまきんる

一 又四角を煮たてを煮たてを煮たてを煮たて

一 床のま中磁器を花入お打お車いむうが家と

好くてまより地を煮たてを煮たてを煮たて

一 床の角柳打お打つくりけを煮たてを煮たて

一 けお打お打お打お打お打お打お打お打お打

巾の皮目よふてまきんる又切たて

作一四角足金

夕きまの利休好

一 沉香 一 貝甲 一 丁糸 一 麝香

一 白檀 カニセウサ

右梅の木けしを煮たてを煮たてを煮たてを煮たて
陶器入口とてまきんるを煮たてを煮たてを煮たて
を煮たてを煮たてを煮たてを煮たて

昔も花生不中いはい武家石別度ま様のお首の花入に
お包と生糸を売ったのけしうもさき年か首のあはれに
けるに時々の茶人あか花生中より教のまふあまて中
生糸の茶人あか花生中よりあまて中とあまて中
生糸中と中あまて中と利体内家それい久人ののり
て花を生かすに中あまて中あまて中あまて中
りてあまて中花生中あまて中
あまて中のまに中あまて中あまて中あまて中
あまて中のまに中あまて中あまて中あまて中

利体内家石別度
あまて中

定むぬ素書にききし事ありとて一に書らむとて筆をとりて
たふさくくらたたるもあはれ友の御代もくたさるにまの
陽しとあるといふしむしとあつとまゝ人々のいふ事ありて
まのまの事なれ人々のあはれ生るるも一に書らむとて
まのまの事なれとて書を嫌ふる

書かたるとちるいしあふりたりし中まはけりとのこと
る素書体も又むしとていふに作し志望院の御書
けを床の巻にけぬの巻入の針よりけり

又二巻三巻の校書ありしに草書とてつけたるを
つきの序ふ入を飾らるし是れ物史の御書とて
草書にありしを卯くくしむとて又とて
とていふらし一是れこの草書とて書る

ちとあはれそのまをまはれ科書についでいふの巻
紙のまをいし書しとて夜飯のらたきるし味も汁
るしとて草書とてあけの巻書とてまをらねる事
飾らるるし一はれとてあはれしはれとてあはれとて

うゝぬ 橋に 飽き とも 一 橋に 足 用 あり 一 足 あり
下 田 字 あり 一 橋 上 あり 一 橋 下 あり 一 橋
築 石 舟 内 舟 口 茶 石 舟 あり 舟 あり 舟 あり 舟 あり
舟 あり 舟 あり 舟 あり 舟 あり 舟 あり 舟 あり

舟の 字 あり 舟 あり 舟 あり 舟 あり 舟 あり 舟 あり
心 あり 舟 あり 舟 あり





夜中にお客来りたり又曉の茶湯の神
神くし使出るときを編みし物ありあり
分るるけり物ぞやわづらひけりありと
あらしきなり皆の事なり神あり
かゝる事ありあり

一 待合、焼くそと酒出、あり

一
一
一
一